

# 決算説明の重要性

今回のテーマは「金融機関への決算説明」です。決算申告を終え、新しい決算書を金融機関に届ける際、書類を担当者に渡すだけで終わっていないでしょうか。しかし、そのタイミングこそ、自社の現状と未来を伝え、金融機関との信頼関係を築く絶好の機会です。今回は、その「決算説明」で伝えるべきポイントについてご説明します。

## 【自社の「今」と「未来」を伝える場】

決算説明は、単に決算書の数字を報告する場ではありません。自社の事業内容や置かれている状況を、金融機関の担当者に深く理解してもらうための重要なコミュニケーションの場と捉えましょう。もちろん、黒字か赤字かという損益（P/L）の結果は重要です。しかし、それ以上に大切なのは「その結果に至った背景」です。例えば、赤字であればその要因を分析し、新年度にどう立て直していくのか、具体的な改善策を説明することが求められます。これにより、金融機関は会社の実情を理解し、今後の資金調達時にもプラスのイメージを持って審査に臨みやすくなります。

## 【B/S（貸借対照表）こそ雄弁に語る】

損益（P/L）と合わせて、あるいはそれ以上に重視して説明したいのが貸借対照表（B/S）です。資産や負債の状況（財務体質）は、会社の安定性を示す重要な指標です。例えば、売掛金、買掛金、在庫の残高に注目し、前期と比べた数字の動きと、その根拠をセットで伝えることが重要です。特に在庫が大きく増えている場合、その背景（意図的なものか、滞留しているのか）と、今後の圧縮計画などを明確に伝える必要があります。また、今後の設備投資計画があれば、その時期や必要な資金額も共有しましょう。

金融機関は、決算書をもとに信用格付を行います。その際、勘定科目内訳書を精査し、例えば長期間変動のない売掛金を「不良資産」と見なし、資産から控除して実質的な財務内容を判断することがあります。こうした評価ギャップを防ぐためにも、B/Sの具体的な内容を事前に説明しておくことが極めて重要です。

## 【将来の資金ニーズを先読みして共有】

可能であれば、決算説明の際に「予測資金繰り表」を提示することも有効な手段です。会社経営において、損益管理と並んで資金繰り管理は生命線です。新年度の予測資金繰り表を作成することで、どの時期に資金がタイトになるかを事前に把握できます。これを金融機関と共有しておけば、資金が必要になるタイミングを見計らって、金融機関側から融資の提案を受けられる可能性が高まります。逆に、資金が底をついてから慌てて相談しても、希望通りのタイミングや条件での融資は難しくなりがちです。

さらに一步進んで、「中期事業計画」を策定し、説明の場で提示することも非常に効果的です。世の中が目まぐるしく変化する中、将来を見据えた設備投資や人材戦略が不可欠です。

金融機関は信用格付の際、数字（定量評価）だけでなく、事業の将来性や成長性といった「定性評価」も行います。社長自らの言葉で中期的なビジョンや戦略を語ることは、この定性評価に大きく寄与します。

## 【最後に】

決算説明は、業績が黒字でも赤字でも、包み隠さず自社の現状を伝え、理解を深めてもらうための貴重な「アピールチャンス」です。決算書を渡すだけで終わらせず、この貴重な対話の場を積極的に活用し、数字の裏にあるストーリーや将来のビジョンを共有することで、金融機関との強固なパートナーシップを築いていただければと思います。